

## 「私のほうが、悩みは深いかも……」

### と指導を受けることになった氷川さん（仮名）

氷川さん（仮名）は、41歳の中学校の先生です。担当は国語。

お子さんの発音の問題には、お子さんの入学前には気づかれていました。ことばの教室の存在を知っていた氷川さんは、入学後早速担任にことばの教室で指導が受けられるようお願いしました。ところが、担任からの返事は、「変な発音はないし、話はよくわかるし問題ないので、特にことばの教室に行く必要はありません。」ということで愕然としてしまいました。

実は、氷川さん自身にもお子さんと同じ発音の誤り、[キ・ケ・キャ行] [ギ・ゲ・ギャ行]などの発音に側音化構音があったのです。

ようやく相談に見えたのは、2学期も終わるクリスマスの頃でした。

お子さんの相談で見えたはずの氷川さんの話は、ご自身の言葉の問題とオーバーラップした話になりました。その時ふと漏らした言葉が「私のほうが、悩みは深いかも…」なのです。氷川さんの悩みは、昔の資料を整理していたときに発見した、ご本人の作文から紹介したいと思います。

私は人と話をするのが好きです。が、人と話をすることにコンプレックスを感じています。それは、私の発音が他の人と違うことに気づいたからです。

自分の発音が他の人と違うことに気づいたのは、大学生の時です。それまでは、「ちょっと言いにくい言葉があるな。」とか「口がまわらないなあ。」と思う位で、他の人から指摘されたり、笑われたりすることもなく、「気のせいだ」と思い込んでいました。ところが、大学生時代のある日のこと、突然「大熊さん(旧姓；仮名) “き” って言ってごらん。」と言われたのです。自分でも言い難いと感じていた発音でしたが、「あなたの“き”なんか変だよね。」と言われ驚きました。さらに続けて、私の真似をしてその人が言った“き”の発音は、私が聞いても変だと感じましたし、『自分の発音は他の人と違う』と自覚をした最初です。それからと言うものの“キリン”や“ペンギン”がうまく言えないということで、時々ふざけては「キリンって言ってみな」、「ペンギンって言ってごらん」などとからかわれるようになりました。そんな時私は、みんなの前では笑っていても、心の中では深く傷ついていました。「どうして言えないのだろう」とアパートで一人、鏡に向かって発音の練習を試みました。なかなか上手に言えるわけもなく『嫌な発音だ』と諦め、大学生活を送るようになりました。

大学卒業後、教員として働くようになると、ますます自分の発音が気になるようになってきました。

生徒の前で教科書を読んだり、マイクを通して全校生の前で話をしたりすると、笑われたりすることはありませんでしたが、とても緊張し苦痛の連続でした。

結婚すると、さらに嫌なことが増えました。それは、自分の名字にある“ひ”がうまく発音できず、よく聞き返されるのです。特に電話がだめです。何回も言い直し、最後には「は、ひ、ふ、へ、ほ、のひです」と言うことになります。

最近、ある病院の先生から、長男の発音について指摘を受けました。実は長男も私と同じような発音で、「ちょっと変かな？」とは思っていたのですが、私もそうであるように“上手に付き合っていかなければならないこと”なのだと思います。さらに“ことばの教室”への通級を勧められました。

私の発音を聞いて育った長男のことですから、私は母親としての責任を感じ、悲しい気持ちになりました。反面、早く気づき、治すチャンスなのだと思うと少し楽な気持ちにもなりました。

私も小学生の頃、“ことばの教室”への通級を勧められたのだそうです。しかし、私の両親は通わせることはありませんでした。“ことばの教室”に対するイメージなど様々な理由があったのだと思いますが、結果として大人となった今でも嫌な思いをし、苦労しています。「小学生の時にしっかり練習していれば……」と思うと残念でなりません。

長男の通級の際、「指導が必要」と言う病院と「必要なし」と言う小学校の間で苦労しました。関係機関の認識の違いを感じました。当然素人の私たちの“言葉や発音、ことばの教室”に対するイメージなど、いかにいいかげんなものであるか想像がつかず。

長男は“ことばの教室”へ通ってきれいな発音に変わるでしょう。最近、二男がたくさんおしゃべりをするようになりました。「二男の発音は大丈夫だろうか？」と、とても心配しています。私は今からでも“大人のことばの教室”があるのなら通って発音を治したい。そして、どんな言葉も気にせず、思い切り話をしてみたいと思っています。